

支えられた日々を、 支え合う力に。

全国からのボランティアに感謝

10年前に発生した熊本地震では、多くの家で家具が倒れ、食器類は割れて散乱し、足の踏み場もなくなってしまうほどでした。「今日、何か食べられる物があるだろうか」「寝る場所をどう確保しよう」…。途方に暮れた私たちを励ましてくれたのは、全国から集まった大勢のボランティアでした。

本震発生6日後の4月22日、熊本市社会福祉協議会は中央区の花畑公園に災害ボランティアセンターを開設しました。11月までに受け入れた全国からのボランティアは約3万7900人。当時、同センター長だった中川奈穂子・(現)中央区まちづくりセンター政策監は、「ボランティアの皆さんから『助けるぞ』というエネルギーを感じ、胸が熱くなりました」と振り返ります。

発災当時は、災害ボランティアセンターの認知度が低かったこともあり、被災者からのニーズを把握できないことが大きな課題でした。「ボランティアに活動を紹介できない日もあり、申し訳なかった」と中川政策監は話します。

熊本地震では大勢の人が被災した状況であったため、「助けてほしい」と言えずにいた人も多くいました。センターでは一軒一軒回ってニーズを掘り起こし、家の片づけや、道路のごみを取り除く作業、支援物資の仕分けなどをボランティアに依頼しました。

「災害時、寄り添ってくれる人がいることが、こんなにも大きな力になるとは思ってもいなかった」。そう感じた人は少なくないでしょう。災害時、被災者を勇気づける大きな力となるボランティアの存在はとても大切で、被災地の復興支援に重要な役割を果たしています。



4月16日の本震で大きく傾いた民家



本震が発生した4月16日撮影



たくさんの方が駆けつけた
災害ボランティアセンターの様子



被災地で活動する学生ボランティア

※写真は「熊本地震記録映像集」制作のため公募したものを含む

今度は支える側で恩返し…「支援はだれでもできる」

今度は支える側になって恩返しをしたい、と思っている人のために、
中川奈穂子・政策監にアドバイスを聞きました。



中央区まちづくりセンター 政策監
中川 奈穂子

災害時には被災地の社会福祉協議会が災害ボランティアセンターを立ち上げますので、まずはその情報をキャッチしていただきたいと思います。500円程度のボランティア活動保険がありますので、地元で加入して現地に行くことをお勧めします。高速道路の利用料が減免される場合もありますので事前にご確認ください。

災害ボランティアというと、がれきの除去など

力仕事をイメージされがちですが、家の中の食器の片づけや炊き出し、話を聞く傾聴など、支援の方法はさまざまです。被災地では息の長い支援が必要になることから、被災直後ではなく少し落ち着いたころ、ボランティアの経験のある人と一緒に行くのもいいと思います。

現地に行けなくても、自治体を通して義援金を送ることも被災者の支援につながります。



(市社会福祉協議会)



(NEXCO 西日本)

7ページ
自転車の交通ルールクイズの答え

正解は ×

自転車の2人乗りは原則禁止で、16歳以上が**幼児用座席**に未就学児を乗せる場合などに限って認められています。(道路交通法第57条第2項、熊本県道路交通規則第13条第1号)

熊本市コールセンター

市の手続きや休日当番医など、気軽にお尋ねください。

午前8時～午後8時(年中無休)

ひごまるコール ☎ 096-334-1500

ひごまるコール



市政へのご意見・ご提案

市民の声投稿フォーム
市政に対するご意見やご提案等をお寄せいただき市政運営にいかしていきます。

市民の声投稿フォーム



公式ホームページ・SNS

最新情報をお届けします

ホームページ



Facebook



X



LINE



配布に関する問い合わせ

市政だより配布センター

☎ 0120-666-659

午前8時～午後8時
(土・日、祝日は除く)